東京学芸大学　令和元年度「若手教員等研究支援費（若手教員等支援枠）」研究成果報告書

研究課題	日本語学習者の読解活動における読み誤りの研究	
氏名 小西　円	所属 留学生センター	職名 准教授

APRIN e-ラーニングプログラムの受講　☑←受講済の場合はチェックをすること

【研究成果の概要】　（文字の大きさ 9 ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

本研究の目的は、中級日本語学習者が読解過程で読み誤る過程を分析し、その傾向を明らかにすることである。

具体的には、中級学習者が白書を読む過程を詳しく分析した。調査の方法は、学習者に白書の一部分を読んでもらい、学習者の母語で読解課程を発話してもらう、というものである。分析時には、それらを翻訳したデータを用いている。また、学習者が読解中に行う辞書引きなどの過程も記録し、分析した。

本支援を得る前から行っていた調査を含め、本年度は、それらの調査結果をもとに分析と論文執筆を行った。論文は来年度に同様のテーマを扱った論文集として出版される計画である。現在、共著者と論文の読み合わせを行い、改訂を行っている。また、同様の内容を 2020 年秋に開催される学会にて発表すべく、応募の準備中である。

分析の結果を簡単に述べると、学習者が白書を読む困難点として、以下の３点があげられる。これは、これまでにない調査手法による新しい知見として、これから発表予定の内容であるため、具体例の記述は避ける。

（１）白書に使用されやすい表現に関する知識の不足
事例）基本的な文法項目を用いた「白書に使用されやすい表現のまとまり」と「その意味」があるが、それに気づかない。
事例）「白書に使用されやすい表現」を、似ている文字列でなじみのあるものに読み違えてしまう。
事例）数字を含む文を読み違えてしまう。

（２）辞書引きに関する知識の不足
事例）専門用語の辞書引きの工夫点を知らない。
事例）活用された語を辞書形に戻して辞書を引くことができない。

（３）複雑な文の構造に関する知識の不足
事例）長い名詞修飾と並列構造が読み取れない。

論文集では、上記に示した学習者の困難点分析に基づいて、教材開発についても論じられる予定である。

【研究成果発表方法】
（１）2020 年秋の「日本語教育国際研究大会」（@香港・マカオ）にて発表予定：現在応募原稿作成中
（２）野田尚史編『コミュニケーションのための日本語読解教材の作成』の中の 1 篇として、2020 年冬頃に出版予定

※発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに 1 部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。